

知識探訪

多民族社会の横顔を読む 協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

ボルネオゾウの旅路の果て

井口次郎 (株式会社パデコ)

東マレーシアのサバ州には 1,000 頭以上の野生のゾウが生息し、キナバタンガン川下流等では人目に触れることも多く、自然観光の目玉の一つにもなっています。野生の象徴とも見えるこれらのゾウたちが、実はボルネオ島にもともと生息していた動物ではなく、かつて人間により連れてこられた「外来種」かもしれないことをご存じでしょうか。

ボルネオゾウの起源については、在来説と外来説の間で長い間議論が交わされてきました。在来説はゾウが先史時代から当地に生息していたとするもので、外来説は人間によりボルネオ島に移入されたゾウの子孫とするものです。2003 年、この議論に答を出すべく、ボルネオゾウの DNA の分析がなされました。その結果ボルネオゾウは他地域に生息する最も近縁なアジアゾウ集団とも 30 万年前に分かれており、「亜種」とみなして良い遺伝的特徴を持っていることが分かりました。

これは、他のアジアゾウと比べてボルネオゾウが固有の外見的特徴(小さい体、大きい耳、長い尾、真っ直ぐな牙)や、行動(比較的小となしい)を持つこととも一致します。そして、もしボルネオゾウが人間により他地域から移入されたゾウの子孫であるならば、遺伝的に近い母集団が島外のどこかにいるはずですが、現存する他のアジアゾウ集団との間に 30 万年以上の遺伝的隔離があることから、同分析ではボルネオゾウの外来説を否定しました。起源論争は在来説で決着がついたとも思われました。

他方、在来説で説明できない謎が依然として残りました。ボルネオ島では先史時代のサイ、バク、ヤギウウの化石・遺物は出ますが、ボルネオゾウの祖先と思われるゾウの化石・遺物がほとんど出ないのです。ボルネオ島産とされるわずかなゾウの化石にしても、出所の信憑性が疑われるものでした。

2008 年にこれらの事実や謎を全てうまく説明する仮説が発表されました。それは外来説を採り、すでに絶滅したジャワ島のアジアゾウ(ジャワゾウ)が人間によりボルネオ島に持ち込まれ、それが野生化したとするものです。これによれば、ボルネオ島にゾウの化石が出ないことの説明がつかます。また同時に、先史時代にジャワ島に隔離されてきたゾウが起源であり、それがすでに絶滅しているならば、ボルネオゾウが他地域のゾウと遺伝的に離れていることにも説明がつかます。

14 世紀頃から、東南アジア地域の諸王国の間では寄贈品としてゾウを送ることが一般的でした。ジャワ島のゾウはまず現在の南フィリピンにあったスルー王国に送られました。王国で飼われていたゾウはやがて野生化し、18 世紀には王国中心地のホロ島の森ではゾウの群れが観察されています。そして、当時スルー王国の支配はボルネオ島北西部(現在のサバ州)にも及んでいました。彼らは自らの領土を示すため、あるいはホロ島にこれ以上ゾウを増やさないためにゾウをボルネオ島に放したという記録がありま

す。また、16 世紀半ばブルネイ王国では外国の賓客を王宮までゾウに乗せて迎えました。なお英領北ボルネオ(現在のサバ州)やサラワクでは 19 世紀末～20 世紀半ば木材伐採等の重労働への使役のため島外からゾウを輸入しました。これらのどれかがジャワゾウの子孫であり、それが野生化したものが現在のボルネオゾウと考えられるのです。他方、起源地ジャワ島では 18 世紀までにゾウは絶滅し、ホロ島で野生化したゾウも 19 世紀には絶滅しています。

これが事実だとすれば、ロマンさえ感じさせる、まことに数奇な運命をこれまでボルネオゾウは迎ってきたこととなります。有名なジャワ島のポロブドール遺跡の壁面には、戦闘用の衣装をまとったゾウが彫られています。彫刻にその姿を残すのみのこのゾウが、ボルネオゾウの祖先に他ならないということとなります。突飛な仮説にも聞こえますが、今のところこの仮説に対する説得力のある反論はありません。



そして今日、ボルネオゾウはまた運命にもてあそばされています。彼らが生息するサバ州の森林は、この 40 年間でその 40% 近くが減少し、多くの森がアブラヤシ農園に転換されました。ゾウの生息

地は分断され、農園を荒らすため「害獣」として駆除されることさえあります。起源地で絶滅しているのに、ボルネオゾウは 30 万年にも渡って固有の進化を遂げてきた「亜種」の唯一の生き残りです。保護すべき価値のある希少な動物と言えるでしょう。

< 筆者紹介 >

国際協力コンサルタント。1990 年代初頭にサラワク州ピンツルで実施された熱帯林再生実験に関わり、マレーシアとのつきあいが始まる。2001 年以降は、サバ州で国際協力機構が協力するボルネオ生物多様性保全プログラムに専門家として従事した。マレーシア以外でも環境保全事業に携わり、近年はマレーシア系企業が木材産業の多くを占めるパプアニューギニアの森林問題について調査している。2002 年にブルネイ系マレーシア人と結婚、4 人の子らとコタキナバルに住んでいる。学術博士(国際開発学)。